☆　子ども会（学習会）だより　☆

MY SKY 第9号　☆　☆

マイ スカイ

1996年６月11日火曜日発行（毎週火曜日定期発行）

発行者
板野中学校
学習会
編集・文責：吉成正士

いよいよ梅雨入りで，毎日じっとりしたお天気が続いていますね。お天気のせいでしょうか，気持ちもスッキリしません。けど，考えを変えれば雨もなかなかいいものです。降る雨を窓からボーッとながめていると，気持ちが沈むというよりも，心が落ち着きます。やはり気持ちの持ちようですかね。

▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼

◎徳島県部落解放中学生交流会第１回実行委員会（６月１日：板野町総合センター）

報告が遅れましたが，６月１日(土)に板野町総合センターで行われた県中の第１回実行委員会について報告しておきます。

お昼の３時近くなるにしたがって，いろんな中学校から中学生や先生たちがボツボツと集まりはじめました。参加した中学校は，吉野中，大麻中，山川中，そして板野中でした。その他にも，先生だけ参加していただけたところや，参加したいけどできなかったところもあり，県内にも「つながりたい」と感じていた人が多くいたことがよくわかりました。実際，全校生徒３００人の中で，学習会生徒が２人という中学校もあります。その学習会生徒は，同じ立場の仲間とのつながりを求めているのだそうです。

当日を含めてこれからの実行委員会も，そういう仲間の存在を確認し合い，勇気や力が湧き出てくるような，そんな会にしていきたいと思います。

次の文章は，後日届けられた感想文の一部です。読んでみてください。

> 僕は今回の会に参加して，板中の子が受けた差別は絶対に許せないと思った。このようなことが現実に起こるのは，まだ差別について正しく理解できていない人がたくさんいるということだと思った。僕たちはまだこのような差別を受けたことはないが，社会ではどんなところで差別を受けるかわからない。その時にどんな考えを持つかが，学習会で学ぶ，一番大切なことではないだろうかと思った。　　他校生３年男子
>
> ※

自分の学習会のときでも，２，３人来てないときがある。そんなときは，その子にどう対処して，どういうふうに声をかけていかなければならないか，ということを考えていこうと思う。そして，学習会のときに，同和問題や差別のことについて，話し合う時間をとった方がいいと思います。

他校生３年男子

※

今回他校のすばらしい意見や，自分の体験したことを聞かせてもらって，あらためて，差別の残酷さを知ったような気がします。今回は全然自分の意見を発表することができなかったけど，次の会までに，いろいろ考えておいて，ちゃんと言えるようにしようと思います。それと，私は３年生で，今年受験なので，いろいろ進路のことも話したいと思っています。１，２年生の人も来年，再来年自分たちに関係してくることなので，むだにはならないと思います。

他校生３年女子

※

今日の会は，板野中学校の子がいろいろな意見を出してくれたので，考えさせられた。その中の一つは，部落に住んでいるというだけで，いたずら電話がかかってくるということなどを聞かされて，私はそういった差別を受けるのはおかしいと思った。それと，差別される方が一生懸命，学習会などで，部落のこと，人権について話をしたり，勉強するだけでなく，差別をする方がもっと人権や人を思いやる心を持つような勉強をいっしょにしないといけないと思う。そうしないと差別はなくならないと思った。

他校生３年女子

「差別される方が勉強するだけでなく，差別する方も勉強するべきだ」確かにその通りですね。差別する人がいなければ，差別なんてないわけですから！でも例えば，日本国中の「差別する方」の人が，「せーの」で一斉に差別問題について真剣に勉強できればいいのですが，なかなかそういうわけにもいきません。過去の私のように，中途半端な，差別をばらまくだけのような学習しかできないことがあるかもしれません。となれば，やはり「差別される方」が，まず負けない力，正せる力をつけるよりほかありません。そんな力を，多くの仲間とともにつけていこうではありませんか！

速報！！第２回実行委員会迫る！！

来る６／１５(土)，場を吉野中学校に変え，昼の３：00より第２回の実行委員会を行います。８／７当日の企画・運営の裏方役としてやってみようというあなた！ぜひとも参加してください！希望者は，前日１４日までに阿部または吉成まで連絡を！！

▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼

◎人間の尊厳－私の出会いから－福田雅子

先日，「興味深い本があった」と，一冊の冊子を手渡されました。その中でも，特に私の心が引きよせられた部分がありましたので，載せたいと思います。読んでみてください。

私は１９３４年(昭和９年)に大阪市内で生まれました。いま振り返ってみて，私が人権問題に関わるようになったのも，何かそういう風土があったような気がします。私が入学した大阪市内の小学校には，校区に大きな都市型の被差別部落がありました。小学校に入学したのは１９４１年(昭和１６年)，太平洋戦争が始まった年で，縁故疎開をするまでの３，４年間，そこの学校で学んだことが，後に大きい意味をもったと思います。

小学校に入ったとき，まず気がつきましたのが，一年生の教室なのに机が歯抜けの状態になっていて，学校を休んでいる人がずいぶん多い学級だということでした。とくに鮮明に記憶にありますのは，どの人がムラの子，いまでいう被差別部落の人であるということがいち早く情報として流れまして，例えば運動場で手をつなぐときに，その子どもさんのところで手を離してしまうようなことがあったわけです。もっとつらいことには，当時たくさん差別的な言葉があったわけですけれど，「くさい」とか「きたない」という言葉さえ交わされていました。

学校を休んでいる友達のお父さんが亡くなったとき，当時，私の受け持ちの先生は，お葬式の日に級長，副級長だった私たちをその友達の家におまいりに連れて行ってくださった。当時，細い道とひさしを重ね合うような住宅が建ち並んでいる，その被差別部落に初めて入りました。大きなお供えの花束を持って行った私たちが，その道をまっすぐに通れないで，からだを斜めにして通ったことをおぼえています。

いまは環境改善が行われて，すっかり変わることができたわけですけれども，そうした施策がなかったころの都市の被差別部落の当時の状況は，部落差別による生活の不安定な実態があり，子どもたちも家族を助けて働いたりして，義務教育を受けることも充分に保障されていなかったのです。あとで取材の中で聞いたことですが，生活が貧しかった中でも，ムシロ戸がかかっている家は，いっそう生活が苦しい家だったということです。長い間，学校を休んでいた友達が，そのムシロ戸を開けて，すぐ家の中に入ってしまわれた。家の中はたいへん薄暗くて，友達の顔がすごく白く，小さ

く見えました。

私は家に帰りまして，そうした教室での子どもたちの会話だとか，とくに初めて訪ねた友達が住んでおられる生活環境のこととかがとても気がかりで，親に対して，どうして私たちが住んでいるところと，友達の地域の生活の状況が違うのかを聞いたわけです。そのとき，私は三年生のころ，十歳ぐらいのことではなかったかと思います。

父は私に，たぶん被差別部落の成立だとか，部落問題について語りたかったのでしょうが，私は子どもですし，父は「封建時代に，お百姓さんから年貢を取り立てるために，さらにしんどい人をつくって年貢を取り立てやすいようにしたのだ」と大きいところでとらえて教えてくれたわけです。封建時代の身分制度のことまで詳しく言ったかどうかは定かでないのですけれども，そういう話をして，そのとき父は付け加えて，「例えばお前が言うように，生活が苦しそうだとか，学校を休むとか，服装がつましいとか，そういうことは親がなまけたからそうなったのではない。そのことはしっかり知っておくように」と申しました。

十歳位の子どもに，よくそういう話をしてくれたといまも思うのですが，「そういうことに反対してがんばったのが水平社の人たちなんだ」と父は言っているのです。

いま考えてみますと，どうして父がそこまで話をしたのか。子ども心には“水”という字と“平”という字であるとは音できっちりわかりましたが，“社”というのは，何か運動らしいということぐらいで，よくわからない。けれども，そのときとってもうれしかったのを覚えています。

というのは，三年生くらいまでの間は，日常で知らなかったいろんな世界を非常に不思議に感じて，子ども心に，なぜだろうと自問自答したり，関心をもち続けていました。例えば，トタン屋根にプツッと開いた小さな穴から外が見える，空が見える，光が見えるような感じです。

そのときの印象をいまもそのまま抱えているわけですけれども，子どもが不思議に思い，関心をもっていること，すごく背伸びしないとわからない水平ということ，水平社があったということを父が言ってくれたことについて，生意気な言い方ですけれど，私は，これはいつかちゃんとわかる，きっちり理由があることなんだと，子どもの直感力でわかったのです。何か自分がもっている未知なこと，しかも重圧があったようなことに対して，一点の光の穴が開いたことで，何かわかるであろうと予感した。そのことが私にとってすごく大きかったと思うのです。

あとで私は，たまたま水平社の人々に証言を聞かせていただける機会に恵まれるわけですが，ではなぜ父が私にそういうことを話したのか。父は商売をしたり，会社員であって，教育の専門家でもないわけですけれども，実は明治三十五年の生まれで，青年時代に大正デモクラシーの気風にふれていたので，水平社のことはきっちり知っていたと思うのです。

私がのちに部落問題を取材するようになったころ，父はガンに倒れ亡くなるわけですが，その晩年に，「お父さん，どういう気持ちであのとき，あんなむずかしいことを私に教えてくれたの」と申しました。そうすると父親は「そんなこともあったかなあ」と少しにっこりと笑っていました。たぶん，父親と娘の会話，子どもとの会話というのは，このことを教えねばならないというのではなく，ごく日常の当たり前の中で語ってくれた，しかし私にとってそのことは，結果的にすごく大事なことをちゃんと話してくれた，ということだと思います。

父親はまた，関東大震災のときの東京の在日朝鮮人の人たちへの虐殺の問題も話してくれました。父がどういう形でそのことを知っていたのかはよくわからないのですが，東京の町内会の自警団のようなところなどから身近な情報を得ていたのかも知れないと思います。ともかく，朝鮮の人たちが井戸に毒を入れたという流言蜚語によって，在日朝鮮人を殴り殺したその残酷さについて，父親は，日本人はたいへんひどいことをしたのだ，恥ずべきことだ，ということを何度となく話してくれました。

福田雅子プロフィール

１９３４年大阪市生まれ。１９６０年ＮＨＫ大阪放送局入局。現在，ＮＨＫ大阪放送局ディレクター・解説委員，クレオ大阪南(大阪市立女性いきいきセンター南部館)館長，世界人権問題研究センター主任研究員，地域改善啓発センター企画委員，大阪市同和対策推進協議会委員，神戸市同和問題啓発協議会委員

〈主な著作と共著〉「証言全国水平社」「水平社宣言を読む」「差別と表現を考える」「表現と人権」「部落史をどう教えるか」「未来のジャーナリストのために」など

「なんで？」という素朴な疑問。この疑問に対して，明快な回答があるかないか，この違いは大きいと思いませんか？できることなら，明快に回答してもらいたいし，したいですよね。ではできないときは‥‥。問題はこのときだと思います。知ったか振りや，あやふやにすることなく，わからないことは「わからない」と言える勇気と，だから本当のことを知ろうとする意欲を，私は持ち続けたいと思います。

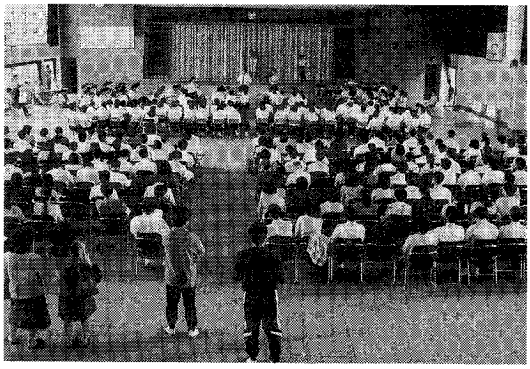
▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼

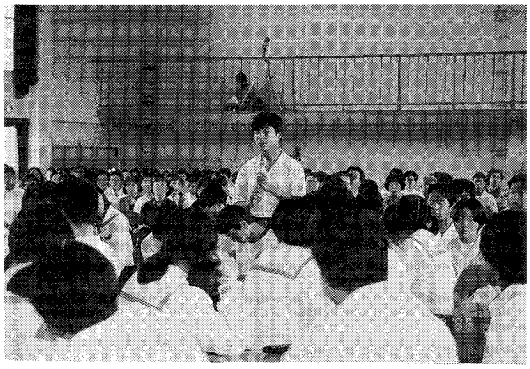
◇ これからの日程 ◇◇ ◇

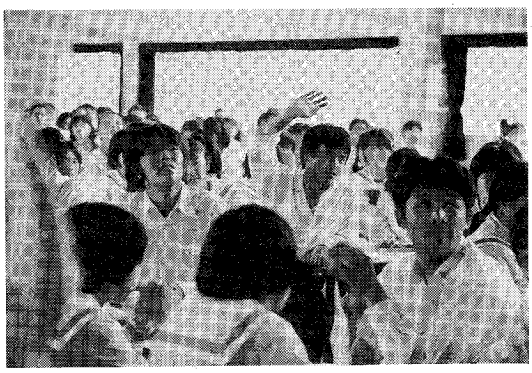
いよいよ町同研(ちょうどうけん)がやってきました。３年生のみなさん！３年Ｅ組のみなさん！今の自分を出しきってみましょう！目標(もくひょう)は，完全燃焼(かんぜんねんしょう)！！

★　★　★　★　★

６月13日(木)　３年第２回全体学習３年Ｅ組(板野町同和教育研究会)：資料「仲間と共に」
　18日(火)　『MY SKY 第10号』発行日







３年第２回全体学習より